原委員提出資料

知の運営――――叡智を交差させ、掛け合わせる。

原　研哉

現在の日本は、学問においては知識が専門分化し、
企業は知と技術を抱え込んで孤立している。

1：本当の問題の発見と共有
2：才能の編成
3：ヴィジョンの「可視化」

優れた未来ヴィジョンの構築のためには、以上の 3 点が不可欠である。
優れた才能と叡智を状況に合わせて編成し、すぐに実用化できる答えではなく、
「多くの創造性を誘発するヴィジョン」を多角的に生み出していく「知の運営」を行い
その結果を分かりやすく「可視化」していく情報の編集・流通が急務である。

自分の経験に基づく事例と提案の 2 方向からこの問題について提言する。

事例 1	TOKYO FIBER―SENSEWARE展

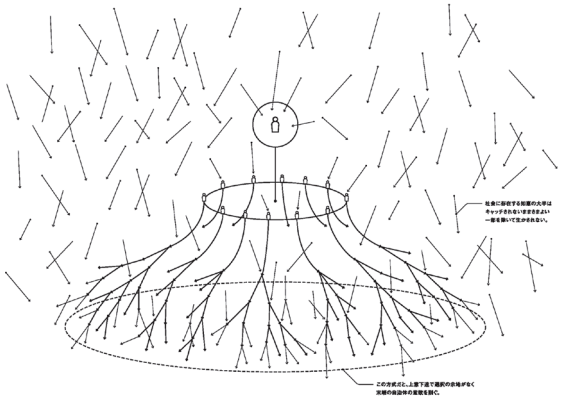
09 年にミラノ、東京他で開催されたエキジビション。
可視化と情報の編集デザインの実例。

09 年ミラノサローネ展覧会より

日本の繊維産業に潜在する可能性を目に見える形にして世界に提示するプロジェクトであった。
衣服用の繊維の大半が中国やインドといった低コスト国に移行し、
日本の繊維産業は高機能なハイテク繊維を多様に生み出しつつあったが、
人工血管、風力発電のプロペラの中、新幹線のシートの中など、
実用的な部分への利用はあるものの用途の広がりや、創造活動との結びつきが弱かった。
この計画は、繊維大手 7 社を機軸に、建築、デザイン、アートの第一級の才能をはじめ、
自動車メーカーやハイテク家電メーカー等も、クリエイター側として参加。
高度化する知的繊維によっていかなる未来環境が創造できるかを、
生活を織りなす一連の製品や環境デザイン文脈の中で提示した展覧会として、世界の話題となった。

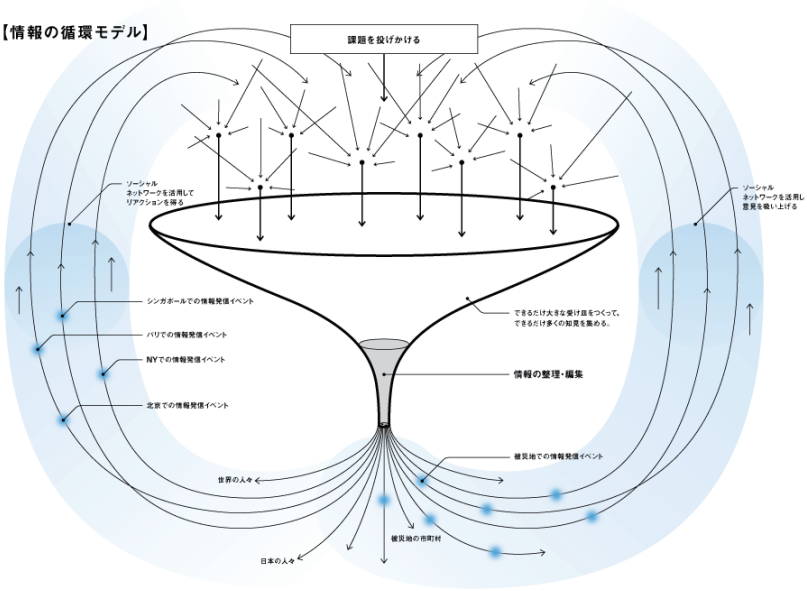
提案 1	東北から未来のアイデアを湧き出させる

復興ヴィジョンを、日本と世界の叡智を集め、編集し可視化する「パラボラ型」の知の運営。



×

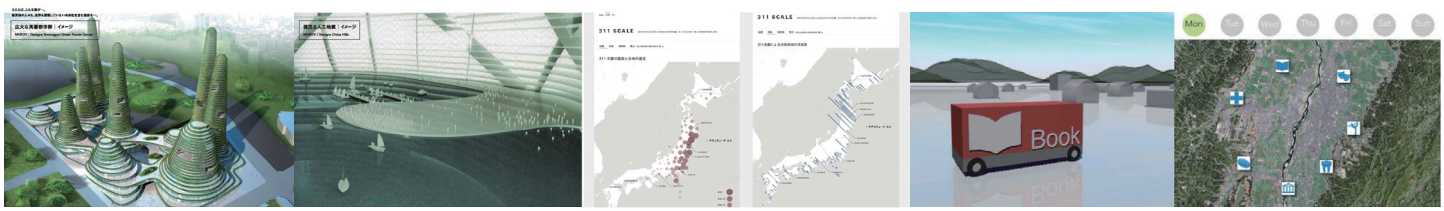
→



○

東日本大震災は、第一次的な緊急対応の段階を経て、
総合的な復興ヴィジョンの策定期に移行しつつある。
上意下達意型の計画立案ではなく、地域ごとの具体案の模索が続いている状況である。
甚大な災害をむしろ契機とし、「東北から未来のアイデアが湧き出す」という
仕組みを作ることが肝要。
民間の、能力を持った人・才能・組織に「適切な課題」を投げかけたり、
具体的に行われている優れた提案を、総合的に集め編集する組織を立ち上げ「可視化」していく。
書籍／ウェブサイトとして、誰もがそれにアクセスできる「見えるアイデア」にしていく。
ゼロから考える「街」・「コミュニティ」・「産業」・「環境」へのヴィジョンは、貴重な未来資源である。
これを合理的に収穫し、叡智として活用できる知のプラットフォームを整理することで、
東北の被災地の人々も、日本の人々も、世界の人々も、ここから未来のヒントを得ることができる。

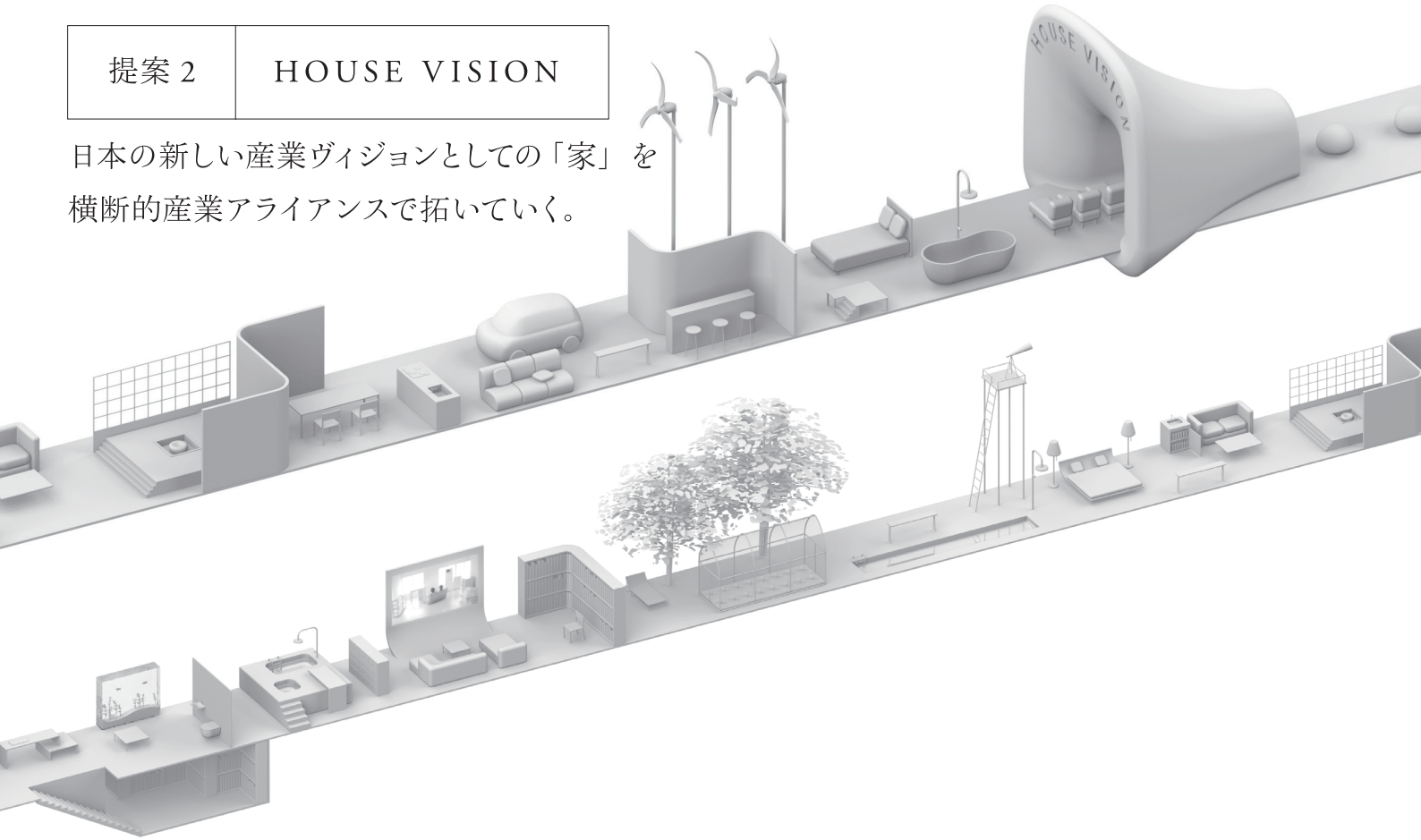
整理の合理性や閲覧性でいくと、web 上での編集が優れているが、イベントや紙媒体も重要。
まとめられたアイデアを、様々な場所で紹介し、語り合うイベントを多数設けていくことで、
現地に具体的なアイデアの種を蒔き続けられる。
また、雑誌のような紙メディアは「うどんを食べながら」アイデアの検討や議論ができる上で有効。



アイデアを結集し「見えるアイデア」にしていく。

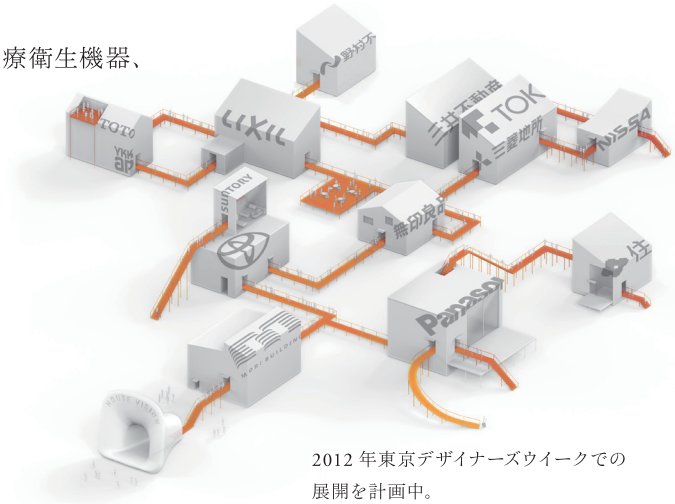
提案 2	HOUSE VISION

日本の新しい産業ヴィジョンとしての「家」を横断的産業アライアンスで拓いていく。



エネルギー・移動・iHouse・高齢市場など、様々な産業の交差点に「家」が浮上してきた。
製品はある土壌に生えた木になる「実」。日本の土壌は肥えている。ここにどんな実を成らせるか。
「家」は成熟期を迎えた日本が収穫すべき「実」である。

スマートグリッド／ハウス、そしてモビリティの未来を具体化する拠点としての家、
テレビ・通信・空調・照明など、複合ハイテク家電の未来形としての「iHouse」、
スケルトン再利用としての住宅リノベーション、
高齢社会における環境と身体のインタラクション、
医療や宅配サービス、そしてコミュニティの再構築……。
大きな意味での住環境、つまり「家」がこれからの日本の産業ヴィジョンの中核になる。
ここに、建築、デザインをはじめとするクリエイティブクラスターの才能と、
エネルギー、土地開発、住宅開発、通信、ハイテク家電、生活機器、医療衛生機器、
家具雑貨、宅配、コンビニなどの各種産業を横断的にかけあわせ、
新しい日本の産業を「可視化」していく。
そのための研究会、シンポジウム、そして展覧会を構想。



2012 年東京デザイナーズウイークでの展開を計画中。

HOUSE VISION in ASIA

大きなアジアの時代の到来を受けて、
中国、インド、インドネシアの住宅産業や建築・デザイン業界と連携し、
未来は「西洋化」ではなく、それぞれの固有文化の地盤のうえに、
いかなる未来が開花するかを一緒に考えていくプロジェクトを展開中。
成熟時代の日本は「家」をめぐる裾野の広い産業をアジアで牽引する存在へと成長できる。